

徳山喜昭コレクション 木札について

著者	佐藤 健太郎
雑誌名	阡陵：関西大学博物館彙報
巻	81
ページ	8-9
発行年	2020-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10112/00023753

徳山喜昭コレクション 木札について

佐藤 健太郎

はじめに

本学の理事を務めた学友の故徳山喜昭氏蒐集の資料（以下、徳山喜昭コレクション）は、高札・看板・木札・米切手・和本・古文書などからなる。そのうち木札は70点余りを数える。

徳山氏が蒐集された木札の内容や時期（江戸時代～昭和時代）は、様々である。以下では、それらの中から4点を取り上げて、紹介する。

1.



表面に「山本利兵衛」、裏面に「禁裏御所」と書かれており、裏面には焼印が押されている。寸法は、14.5×9.6×1.8センチで、中央上部に紐通しがある。

山本利兵衛家は漆師・蒔絵師で、初代武継が1707年（宝永4）に丹波国桑田郡より京に出て学び、1714年（正徳4）に開業した。以後、子孫が代々利兵衛の名を継いで家業に従事した。

本品は、禁裏御所への出入の許可を示す御門鑑である。発給時期は不明であるが、印文の状態からみて、天保～安政年間（1830～1860）に発給されたものと思われる。同期間で活躍したのは、3代光春（1770～1838）・4代武光（？～1870）である。光春が仁孝天皇、武光が孝明天皇の即位の調度にそれぞれ蒔絵を施している。安政4年（1857）に武光が内裏常職に任ぜられていることから、本品は武光に下されたも

のと考えられる。

2.



表面に「丹波国氷上郡三原村／材木商石倉吟兵衛／住式千八拾八番」と書かれ、右端上部に朱印と中央上部に割印が押されている。裏面には「明治五年／壬申九月／豊岡県庁」と書かれ、朱印が押されている。寸法は、15.4×10.2×1.2センチで、中央上部に孔があげられている。

本品は、1872年（明治5）に豊岡県庁が発給した商業鑑札である。本コレクションには、同様のものが他に3点（鋳物商・指物職・鋳掛職）ある。書式は同じであるが、奥の番号の冒頭が「器」・「雑」と異なっている。これは、業種・職業などの種別を表す記号であったとみられる。

なお豊岡県は1871年（明治4）の廃藩置県により豊岡藩が県となったもので、同年9月の第1次府県統合で但馬国4県・丹後国4県・丹波国3県が統合されて改めて豊岡県が設置された。しかし、1876年（明治9）の第2次府県統合により、豊岡県は分割されて、京都府と兵庫県に編入された。

3.

表面に「はノ二番／上座壺人／上り」、裏面に「彦根丸」と書かれ、裏面には焼印が押されている。寸法は、15×5.3×0.5センチである。



本品は彦根丸の乗船札であるが、彦根丸は史料上に確認できない船である。そこで注目されるのが、金亀丸である。

金亀丸とは1870年（明治3）に旧彦根藩の奨励補助のもとに建造された蒸気船（18トン、15馬力）である。船名にも彦根藩とのつながりを見ることができる。藩庁が置かれた彦根城の異名は金亀城で、異名を金亀丸は有している。すなわち彦根藩と深いつながりを持つ「金亀丸」こそが、「彦根丸」であると考えられている。

なお金亀丸は、米原－大津間を航行したが、1887年（明治20）に廃船となっている。したがって、本品は1870年から1887年までの間に発行されたものとみられる。

本品は木製であるが、本コレクションには紙製のものもあるので、あわせて紹介したい。

長運丸の乗船券で、寸法は16×5.3センチである。長運丸（8トン、8馬力）は、1873年（明治6）に就航し、長浜－大津間を航行したが、翌年に唐崎沖でのエンジン破裂のため沈没した。したがって、本札は1883年から1884年までの間に発行されたものである。



両品の記載から、座席に「上座」・「並座」の区別や指定用の座席番号などがあったことがわかる。

4 .

表面に「砲具製造所」の焼印、「精密工」の刻印、裏面には「改1148」の刻印、「東京砲兵工廠」の焼印がそれぞれ押されている。表面には「星野繁八郎」と書かれている。寸法は、



7.1×4.5×0.8センチである。上部に紐通しがあること、両面にニスが塗られていることなどから、本品は門鑑と思われる。

東京砲兵工廠は小銃製造所（小銃製造）・銃包製造所（弾薬製造）・砲具製造所（小銃以外の武器製造）の3部門から構成された日本陸軍の武器製造所である。砲具製造所は1872年（明治5）に開業した大砲修理所が1890年（明治23）に改称したもので、鍛工場・木工場・鋸工場・鞆工場・鋳工場・図工場からなり、1893年（明治26）には「精密工場」が新設された。

本品は、測遠機や照準器などを造る精密工場に所属した工人のものと思われる。1923年（大正12）に東京砲兵工廠は大阪砲兵工廠と合併し「陸軍造兵廠東京工廠」となることから、本品は1893年から1923年までに発給されたものと推測される。

おわりに

紙数の都合上全ての木札を紹介することはできないが、以上のほかに入山札・質家符・氏子札・通札・門鑑・会符・米切手などがある。米切手については、本コレクションには紙製のものもあるので、後日あわせて紹介したい。

【参考文献】

- 大津市歴史博物館編『琵琶湖の船 丸木舟から蒸気船』（1993年）
- 佐藤昌一郎『陸軍工廠の研究』（八潮社、1999年）
- 琵琶湖汽船株式会社編『航跡 琵琶湖汽船100年史』（琵琶湖汽船、1987年）
- 風俗絵巻図書刊行会編『蒔絵師塗師両工伝』下（吉川弘文館、1925年）

関西大学博物館 年史編集室学芸員